

研究ノート

三遠南信における霜月祭¹

野村仁子

序文

人文社会研究所の三遠南信班では昨年度（2021年度）から3年間かけてこの地域の研究を行なう予定である。2021年度は奥三河へ行き現地調査を行った。2022年度は残念ながらコロナ感染症のため私は参加できなかったが、班としては南信で現地調査を行った。班の中での興味・関心は多岐にわたっているが、私はこの地域の「祭り」、とりわけ旧11暦月に行われる「霜月祭」に焦点を当てて研究していく²。特に、その成り立ちと信仰体系、また、祭りの儀式の中で様々な信仰が習合している様子を地域別に浮き彫りにしたいと考えている。そのため本研究ノートでは、地域の祭りの現地調査を行うに際して着目する点を明らかにし、それぞれの特徴を纏め概観していくことを目的とする。また、各項目ごとに三遠南信地域の包括的な特徴、その後各地域の特徴を述べることにする。また、筆者の興味・関心の点から祭りの次第とその内容に重点を置いている。

愛知県・長野県・静岡県の県境を接するいわゆる「三遠南信」地域³では古くから旧暦11月に霜月神楽が行われてきた。霜月神楽自体は全国各地で見られる祭

¹ 参考文献として以下を使用した。『花祭り』、早川孝太郎、講談社、2009年。『花祭りの起源』、山崎一司、岩田書院、2012年。『神楽と出会う本』、三上敏視、アステルパブリッシング、2009年。『霜月神楽の祝祭学』、井上隆弘、岩田書店、2004年。『国立歴史民俗博物館研究報告』第142集、「三信遠における死霊祭儀 静岡県浜松市水窪における霜月祭と念仏踊の比較研究」、井上隆弘、2008年。『国立歴史民俗博物館研究報告』174集、「湯立神楽の意味と機能 遠山霜月祭の考察」、2012年。また、遠山郷観光協会ホームページ (<https://shimotsukimatsuri.com>)、花祭り会館のホームページ (<https://omoteyaen.co.jp/hanamatsuri/>)、東栄町役場のホームページ (<http://www.town.toei.aichi.jp>)、浜松市ホームページ (<http://www.hamamatsu-books.jp/category/detail/4f0cf137aca49.html>) も参照した。

² 三遠南信地域の霜月祭り、特に花祭りや遠山霜月祭りについては多くの先行研究が存在しているため、個々の祭りの詳細についてはそちらを参照してもらいたい。

³ 三遠南信地域は、愛知県東三河、静岡県遠州、長野県南信州の3地域からなり、28の市町村で構成されている。面積5,635km²・人口約208万人。歴史的には、天竜川の水運、塩の道（塩や生糸の流通）、秋葉街道、東海道等を通じて、人や物資が従来し、活発な文化交流がなされ、お互いの地域発展や生活・文化の向上に影響を及ぼし合ってきた。

であるが、三遠南信の霜月神楽は「湯立」⁴を中心として祭事が行われることに特徴がある。これを地域別に分けると以下の通りである。本研究ノートでは①の奥三河の花祭り②の遠山の霜月祭り④の北遠州の霜月神楽の共通点と相違点を探っていく。

①花祭り・・・奥三河（愛知県豊根村・東栄町・津具村）

②霜月祭・・・南信州 南信濃地区（和田・八重河内・木沢・小道木川合）
上村地区（程野・中郷・上町・下栗）

③冬祭り・・・南信州（天龍村）

④霜月祭・・・北遠州（天竜区水窪町・佐久町）

成り立ちと信仰

三遠南信の霜月神楽は、伊勢・熊野・諏訪の神楽の影響を受け成立したと言われている。特に伊勢神楽の影響は大きいとされ、伊勢神楽に分類される⁵こともある。しかし2021年の奥三河での現地調査では熊野の修験道との関わりが深いという話が聞かれた。鎌倉末期から室町時代にかけて熊野の修験道が伝えたということである。熊野は修験道の根拠地であり、湯立てが行われていた。熊野の修験たちは南北朝時代以降、本山に留まり得なくなり、修験たちの多くが各地へ流入していった。もともと天龍川流域は熊野から諏訪へと往来する修験たちの通り道であったこと、また、熊野信仰が衰退し伊勢信仰が広まっていく過程で、熊野の修験たちが伊勢へ御師したことなどから鑑みても、現地調査での話には納得がいく。また、三遠南信の霜月祭の中心が湯立てにあることから、当初熊野の修験道から湯立が伝えられ、その後伊勢の御師から湯立て神楽が伝えられたのではないかと考えられる。また、天龍川流域を伝搬していく過程で、土着の信仰や御霊信仰と結びついていった可能性も指摘できるのではないだろうか。

以上のように三遠南信の霜月神楽はそのルーツを同じくしていると考えることができる。しかしながら、地域や地区によって結びついた信仰が同じだとは考えにくい。筆者の専門であるキリスト教史においても、例えば、批判を恐れずに言うならば、クリスマスと言う祭りは、ローマではミトラ教やサトルヌスの豊穰儀礼と結びつき、その後北に布教を広める過程で、樹木信仰と結びついていき、現在に至るものである。この三遠南信の霜月祭りもそれと同様に神道や仏教は勿論のこと、その地の信仰と結びついていったとは考えられないだろうか。これについての研究は更なる考察が必要となるため、今少しの時間を頂きたい。

⁴ 湯立てとは祭場に釜を据えて薪の火で湯を沸かし、神霊や仏菩薩を招いて、笹や御幣で湯を献上し、清めや供養を行う儀礼で、自らも湯を浴びて蘇りを果たす。湯釜の周囲で舞等の芸能を伴う場合を湯立神楽と呼ぶ。湯立神楽の元来の主宰者は、修験・神職・僧侶などであり、死者供養や先祖祭祀を含んでいる。『国立歴史民俗博物館研究報告』174集、「湯立神楽の意味と機能 遠山霜月祭の考察」、2012年、248頁。

⁵ 『本田安次著作集 日本の伝統芸能』、第六巻、錦正社、1995年。

祭りの概観

三遠南信の霜月祭りは「湯立」を祭事を中心に置いていることは先にも述べた通りである。祭りを端的に説明するならば、「釜に湯を沸かして神仏を招き、立てた御湯を献じてもてなす。そして神仏の力が宿った湯を人々が浴びて清まり、再生する。またこの湯立てを中心に様々な祭事や芸能を行う。」と言える。しかしながら、同じ霜月祭りといっても祭りの内容はそれぞれの地域で異なり、その地域の中でも幾つかに分かれている。その詳細は先行研究でも多く示されている⁶のでここでは省くこととし、地域ごとの祭りを大まかに概観していこう。

祭りの特色

この地域の祭りの包括的な特徴として次のような指摘がなされている⁷。①明治以前は神仏混淆であったが、現在は大きく変容している。しかし依然として神仏習合を維持している。②祭日は霜月前半が多い（現在は新暦の11月や12月に行われることが多い。）。③湯立を中核に組み込み収穫感謝や死者を供養する。④自己の身体を清めると同時に生命力の更新を図る。⑤在地の神霊、大地の霊、土地神、山神に対して強い畏敬の念を持ち、在地の古い形式で祀る。⑥自然災害や、共同体の飢饉や疫病、個人の病気などの危機に対し「立願」の臨時祭を行って乗り越えようとする。

①花祭り

15ヶ所で行われており、3つの系統に分けることができる⁸。

大入系・・・坂宇場・上黒川・下黒川・御園・東菌目・津具

振草系・・・古戸・布川・月・足込・下栗代・中設楽・中在家・河内

大河内系・・・小林

舞が自己展開し、長時間かけて舞うことで陶酔し神霊と一体化していく。太夫が結界・湯立・鎮めなどを担当し、舞は宮人による儀式舞、子供たちによる花の舞、青少年による舞の3種類に分かれており、年齢による通過儀礼の様相がある。面は鬼を主体に山の神や土地の神霊が主役で釜の周囲を廻って、人間に土地を譲渡し、豊穰と子孫繁栄を約束する。「湯立が舞に従属する」形式で、舞が主である⁹。

⁶ 注1 参考文献参照。

⁷ 『国立歴史民俗博物館研究報告』174集、「湯立神楽の意味と機能 遠山霜月祭の考察」、2012年、249頁。

⁸ 花祭り会館で行われる東栄フェスティバルでは御園花祭り保存会や下栗代花祭り保存会による花祭りのダイジェスト版を見ることができる。

⁹ 『国立歴史民俗博物館研究報告』174集、「湯立神楽の意味と機能 遠山霜月祭の考察」、2012年、249頁。

②霜月祭り

10ヶ所で行われており、4つの系統に分けることができる。

上町系・・・中郷・上町・程野

木沢系・・・中立・小道木川合・木沢・八日市場

下栗系・・・下栗

和田系・・・和田・八重河内

舞よりも湯立が主である。鎌倉期以降荘園としての歴史を持ち、権力との関わりが濃厚で、江戸時代には遠山一族の虐殺に関わる御霊信仰が加わっている。修験の影響もあるが、神道の儀礼の影響も色濃く残っている¹⁰。

④霜月祭り

静岡県内では獅子が湯立てをする神事も見られるが、三遠南信地域、天竜川沿いでの霜月祭り水窪町と佐久間町に湯立神事が見られる。川合花の舞・今田花の舞・草木の霜月神楽である。これらの祭りは類型はされていないが、川合花の舞や今田花の舞と草木の霜月神楽では違いがあるように感じる。前者は舞を主にしていること、舞の種類や「生まれ清めり」の合言葉など奥三河の花祭りに通じるものがあり、後者は湯立を主にしている。後述する次第でそれを確認することとしよう。川合・今田の花祭りの研究は資料が乏しいことから、あまり進められていない様である。一方、草木の霜月神楽は数は多くはないが先行研究が存在し、次のように述べられている¹¹。「舞をして湯立を繰り返す」が面の造形は展開しない。有力な家の先祖供養や死霊の鎮めの様相が強い。先祖や死霊の供養を通して主従関係の権力性が再確認されることも、他の地域の目的と異なる点である。

祭りの場所

①花祭り

個人の家と神社の2種類がある¹²。かつては大部分の祭りが個人の家で行われており、祭りをを行う家を「花宿」と言ったが、現在は公民館などで行われるようになっている。

¹⁰ 『国立歴史民俗博物館研究報告』174集、「湯立神楽の意味と機能 遠山霜月祭の考察」、2012年、249頁。

¹¹ 『国立歴史民俗博物館研究報告』174集、「湯立神楽の意味と機能 遠山霜月祭の考察」、2012年、250頁。

¹² ・坂宇場（八幡神社）・上黒川（熊野神社）・下黒川（ほのぼの会館）・御園（御園集会所）・東菌目（老人憩いの家 東菌目荘）・津具（白鳥神社）・古戸（古戸会館）・布川（布川集会所）・月（月集会所）・足込（足込集会所）・下栗代（下栗代生活改善センター）・中設楽（中設楽花祭舞庭（改善センター前））・中在家（老人憩いの家 明寿荘）・河内（河内長峯神社境内）・小林（小林諏訪神社境内）

②霜月祭り
神社で行う¹³。

④霜月祭り
神社で行う¹⁴。

役

祭り全体を禰宜が司るというのは、どの祭りでも見られる。しかし、この禰宜が神職であるのか保存会の会員であるのかは地区ごとに異なっている。禰宜の他、禰宜を補佐する役、楽の担い手なども共通して見られる役である。女性は本来祭りに参加できなかったが、近年では後継者不足により、舞などの神事への女性の参加を認める祭りも多くなってきている。また、これも後継者不足によるものであるが、外部からの助っ人を募集している地区¹⁵もあれば、1泊2日の見学ツアー¹⁶を行っている地区¹⁷もある。

① 花祭り
太夫¹⁸・・・神事を司る。
宮人・・・太夫の補佐役。
囃し方・・・笛や太鼓など、舞の際の音楽を担当。
部屋番・・・「部屋」と言う支度部屋で舞手の着付けや鬼の面付けを行う。
セイト衆・・・舞庭の周りの観衆。

②霜月祭り
・禰宜・・・神事を司る。本来は神職であるが、現在は保存会を管理する会員を禰宜と呼ぶ神社もある。
・宮世話人・帳元・・・祭りの進行役
・かしき・・・炊事の世話
・きしめ役・お白餅役・・・特別な神饌を用意する

¹³ ・中郷（正八幡宮）・上町（正八幡宮）・程野（正八幡宮）・中立（正一位稻荷神社）・小道木川合（熊野神社）・木沢（八幡神社）・八日市場（日月神社）・下栗（捨伍社大明神）・和田（諏訪神社）・八重河内（八幡社）

¹⁴ ・草木の霜月神楽（綾村神社）・今田花祭り（一之宮神社と二之宮神社で一年交代）・川合の花祭り（八坂神社）

¹⁵ 遠山霜月祭り、中郷地区・上町地区など。

¹⁶ 榊南信州観光公社主催。

¹⁷ 遠山霜月祭り、和田地区。

¹⁸ 太夫に対する呼び方は地域ごとに様々である。禰宜や花太夫と呼ぶ地区もある。

④霜月祭り

- ・太夫・・・神事を司る。一度太夫になると死ぬまで神事に関わる。
- ・釜洗い・・・太夫の補佐役。
- ・座頭・・・小禰宜の中でも最も経験豊かな者。
- ・小禰宜・・・舞や太鼓の演奏。

釜と飾り付け

祭りの中心は湯立であるから、どの地域も釜を中心にして祭りが行われる。釜の周りに注連縄で結界を張り、神聖な場所、いわゆる「舞庭」¹⁹とし、釜の上には切紙が飾られる。

この切紙には多くの種類があり、それぞれに異なった意味を持ったり、異なった願いが込められている。これについても現地調査を行い、それぞれの特徴についてまとめたいと考えている。

①花祭り

舞庭と呼ばれる土間の中心に釜を作る。釜の上には「湯蓋」と呼ばれる天蓋に5色の細かく切った色紙²⁰が吊るされ、その周りを立願による「びゃっけ」「一力花」と呼ばれる紙飾りが取り囲む。舞庭を仕切る注連縄には「ざぜち」と呼ばれる切り絵が下げられている。

②霜月祭り

各神社で竈門の様相は異なる。五徳を使用したり、石や煉瓦を使用したりする。釜も1つから3つまでと地区によって用いられる数も異なっている。竈門の上には「湯飾り」「湯の上飾り」などと呼ばれる切紙で作られた天蓋が飾られるがこの地域では通常白一色である。飾りには「湯男」「湯雛」「日月」など多数の切紙がある。

④霜月祭り

草木の霜月神楽

綾村神社の建物はそのまま舞庭となっており、舞庭の中央より少し勝手場寄りに炉が設けられている。神事の際にはここを湯殿とし、湯立ての釜が置かれる。そして、炉の四隅には竹が立てられ、2本の注連縄を周囲に張り、シメタレが下げられる。釜の中には「浜水」と呼ばれる天竜川の水を入れ、「湯蓋」という小さな板に取っ手がついたものを浮べて釜の上には「湯げた」と呼ばれる2本のヒノキの棒が十文字に渡される。

今田・川合の花の舞

¹⁹ 「舞庭」「舞堂」「舞所」と表記されるが、ここでは舞庭で統一する。

²⁰ 中設楽地区と河内地区は白一色である。

神社の拝殿前に注連縄で囲まれた舞庭が設営される。舞庭の中心には釜が置かれ、その上には天蓋が取り付けられ「びゃっけ」や「湯ぶた」などの切紙（多くの色が使用される）が下げられる。

次第

湯立が祭りの中心ということもあり、どの祭りも釜に火を入れることが重要な儀式だとされている。釜の周りで舞を舞い、神々、仏や菩薩、産土神などを招き入れるのである。それらの御霊を鎮め、祀ることによって無病息災、共同体の安寧、先祖供養等を行う。また、釜の湯を浴びることによって、心身の汚れが祓われる点も共通している。

祭りは当日の本祭だけではなく、その前後数日間に渡って儀式が行われる。本来本祭は夜通し行われる祭りであったが、近年では時間を短縮して行う地区も多くなっている。

以下の次第は頁の都合もあり、本祭のみに止める。

①花祭り

- 1、滝祓い：禊の意味を持つ神事であり、滝に行き禊を行い、その後その水をうつし迎える
- 2、かどじめ：辻固めと高峯祭りを合わせてかどじめと言う。諸霊を祀る。
- 3、天の祭り：花宿の天井裏に棚を設け、膳を備える。
- 4、お湯立て（神よせ）：神²¹を招き入れる。
- 5、宮渡り：面や祭具などを携えて神社へ渡る。
- 6、きるめ祭り：きるめ（切目）の神²²を招き入れる。
- 7、釜祓い：釜のお祓いである。初めて釜に火を入れる。
- 8、湯立て：釜に湯を沸かし、神仏・諸霊などに献じる。
- 9、注蓮おろし：注連をはる儀式
- 10、ばちの舞：手にバチを持ち舞う。
- 11、式三番：
- 12、地固めの舞：舞庭を踏み固める。
- 13、市の舞：青年は扇と鈴を持ち舞う。
- 14、山見鬼の舞：舞庭に最初に登場する鬼。浄土を開くとされ、「生まれ清まり」の役割を担う。
- 15、花の舞
- 16、花の舞中神事祈願祭

²¹ あらゆる神仏を招き入れる。本来祭りの中心となった神は「見目（みるめ）」だと考えられている。しかし現在ではその中心神は、特に大入系では氏神である。（早川、前掲書、99-100頁）

²² 見目の神と対立する神。何故この神が重要なのかははっきりとしないが、切目は熊野三山に関係の深い紀伊日高郡切目の荘の祭神と関係していると指摘されている。（『花祭り』、早川孝太郎、講談社、2009、105頁）

- 17、順の舞：扇と鈴を持って舞う。
- 18、願主の舞：立願の舞。
- 19、三つ舞：少年3人の舞。扇・ヤチ・剣を持って舞う。
- 20、榊鬼の舞：鬼の中で最も重要とされる。反閤を踏み、大地に新しい生命や活力を吹き込み、自然の恵みや五穀豊穡をもたらす。
- 21、ひのねぎ・翁の舞
- 22、巫女・おさんど
- 23、すりこぎ・しゃもじ：五平餅や味噌のついたすりこぎなどを持ち舞庭に現れ、村人たちを祝福する。
- 24、四つ舞：青年四人の舞。扇・ヤチ・剣を持って舞う。
- 25、湯囃子の舞：藁を束ねて作ったタワシを持って舞い、釜の湯を所構わずかける。この湯を浴びると病にかからないとされている。
- 26、朝鬼の舞：茂吉鬼の舞とも呼ばれる。槌を持って舞う。
- 27、獅子の舞：花祭りの最後の舞
- 28、ひいなおろし：舞庭の中央に飾ったびゃっけを下ろす。
- 29、宮渡り：氏神を元の宮へ返す。
- 30、しずめ祭り：龍王の舞とも呼ばれる。行事を通して最重要の儀式だと考えられる。
- 31、外道狩り：全ての注連縄を切って回る。

②霜月祭り²³

- 1、座揃い（昼食（座揃いの御神酒）・座揃い・火入れ・祓い）
- 2、大宮清め（おわき立て）：大宮清めの神楽を歌いながら神社の各所をまわり、清める。
- 3、神ほぎ
- 4、酒女引き（しめびき）
- 5、神帳・神名帳：全国66の一宮を読み上げ、神々を招待する。
- 6、申し上げ：招待した神々に願い事をする。
- 7、先湯²⁴：湯立（五大尊・神の舞・湯木舞・道開き・湯殿渡し・湯召し）を行う²⁵。
- 8、大宮清め：先湯三・四と並行して行い、社殿・境内を清める。
- 9、上げ湯：社殿・境内を周り湯を献上する。
- 10、湯の花：柄杓・竹筒に湯釜の湯を汲んで集落内の神社や立願のあった家へ持っていき、神楽を歌い清める。

²³ 上町の霜月祭りを参考。

²⁴ 上町タイプの霜月祭りでは七立てを基本とする先湯が行われる。

²⁵ 重要な湯立は役湯と呼ばれ五大尊から湯召しまでを行う。上町系では先湯一、御一門の湯、鎮めの湯がこれに当たる。

- 11、四つ舞：先湯七立に対する式礼の舞。四人の舞い手が舞う。剣も持って舞う劔の舞と扇を持って舞う扇の舞がある。
- 12、津島明神の湯：明治初年に疫病が流行した時から開始。
- 13、鹿島明神の湯：安政2年（1885年）に大地震があった時から開始。
- 14、池大明神の湯
- 15、諏訪明神の湯：昭和28年の大洪水の翌年から開始。
- 16、交通安全祈願の湯：昭和43年赤石林道が開通した時から開始。
- 17、七石の湯：願の内容と神々の名を書いた願帳に基づき神々を呼び上げ湯立を行う。
- 18、御一門の湯：別火精進していた者が一般の氏子と同じ火で炊いたものを口にすることができるようになる。
- 19、八乙女の舞：神前で禰宜数人が扇と鈴を持ち舞う。
- 20、花の御神楽：八乙女の舞に続き禰宜が花の御神楽などを歌う。
- 21、襷の舞：錦の襷と鉢巻をつけた4人が舞う。扇の舞と劔の舞がある。
- 22、羽揃えの舞：留袖に赤帯をたらし、紫の鉢巻を締めた女装の4人が扇を用いて舞う。
- 23、鎮めの湯：死者供養と共に全ての神霊を鎮める。上町では数珠を用いる。
- 24、日月の舞：全ての神々にお帰りを願う。
- 25、面：笛と太鼓に合わせて面が舞う。
- 26、金山の舞：湯の上飾りを切り払う。
- 27、神送り：禰宜2人が神送りを東西南北中央で唱和する。
- 28、遊びのさ送り：禰宜が遊び幣を氏子に渡し、遊びのさ送りを歌う。

④霜月祭り

(1) 草木の霜月神楽

本祭

- 1、神前のお勤め：湯立ての準備、神名帳の読誦²⁶を行う。
- 2、楽のきよめ
- 3、湯ばやし：湯立てに先立ち祭場を清める。
- 4、湯火のおこない
- 5、湯の口開き・玉取り：
- 6、はらい：湯立ての湯で社殿を清める。
- 7、ぶたい：その年に生まれた子を清める氏子入りを行う。
- 8、みかぐら

²⁶ 水窪地区の神名帳には、全国の神々、仏、土地神の他、荒神や山・川などの精霊、禰宜死霊、祖霊などの特殊なタイプの神々のグループが見られる。『国立歴史民俗博物館研究報告』 第142集、「三信遠における死霊祭儀 静岡県浜松市水窪における霜月祭と念仏踊の比較研究」、井上隆弘、2008年。259-260頁。

9、倉入れ：「オヤカタ」と呼ばれる開郷領主の家筋にあたる高氏本家・別家の祓いを行う。

10、ご神共上げ：湯立の釜で炊いた「ご神共」を神に献上する。

11、おいしばちの舞

12、ご神共下げ

13、おんべいの納め：綾村神社の御幣を神社に戻す。

14、もろ湯（神名帳）

15、剣の舞

16、神送り

(2) 今田花の舞

1、釜祓い：釜を清め、火を入れる。

2、地固めの舞

3、金山の二つ舞

4、扇の三つ舞

5、花の三つ舞：稚児の舞で花傘を被って舞う。「買花」と呼ばれる神への願い事を書いた紙を背中に貼って踊る。

6、山見鬼：反閨の足踏みを行い悪霊を追払う。

7、花の四つ舞：小学生が花傘を被って踊る。「買花」と呼ばれる神への願い事を書いた紙を背中に貼って踊る。

8、榊の四つ舞

9、榊鬼：反閨を繰り返し舞庭を鎮める。榊鬼と禰宜の問答を行う。

10、湯ばやしの舞：舞庭での最後の舞。

11、湯伏：湯の玉を観客にかける。無病息災を願う。

12、湯上げ：禰宜の祈祷 九字を切って釜の湯をかき混ぜる。湯を神前に奉納する。

13、釜湯の鎮め

以上、大まかではあるが地域ごとに祭りを外観してきた。一言で「霜月祭り」と言っても、その様相は大きく異なっていることが見て取れる。奥三河の花祭りでは、湯立は祭りの始まりに一度しか行われず、舞の数が他地域に比べて圧倒的に多く、舞が祭りの中心になっていることが分かる。また浄土や「生まれ清まり」の概念からしても、「清め」が重視されている祭りだと言える。一方遠山の霜月祭りは湯立を行う毎に舞が奉納され、舞よりも湯立てが重要視されていると言える。また、「清め」よりも神仏を鎮め、祀ること、御霊信仰に基づく鎮魂が主になっていると考えられる。北遠州の霜月祭りは草木霜月神楽と今田・川合の花の舞では様子がかかなり異なっている。草木の霜月神楽では湯立が主であり、その目的も、その地の有力一族や代々の禰宜の鎮魂という要素が大きい。今田・川合の花の舞は、草木霜月神楽とは一線を画し、奥三河の花祭りとの類似性を指摘することができる。このように地域によって多くの相違点も見られるが、どの地

域の祭りも「湯立」を通し神仏や土地神、諸霊を鎮め、祀り、それらに願いを託すこと、また祓い清められた湯を浴びることによって、心身の穢れを祓い、「再生」、つまり「生まれ清めり」を感じているということでは一致している。

コロナ感染症で、ここ数年祭りを中止している地区も多くあった。今年は感染症から少し落ち着きを取り戻してきたので、現地調査を意欲的に行い、三遠南信における「霜月祭り」の研究を一層深めていきたい。

（のむら ひさこ／愛知県立大学兼任講師）